

1. 第18回受賞者の選考

福岡アジア文化賞の候補者は、世界各地の大学や研究機関、芸術文化団体など約4,000人の推薦委員からの推薦に基づいて選考される。

第18回は27カ国・地域、207名・団体の中から、「学術研究賞選考委員会」および「芸術・文化賞選考委員会」において有力候補者を絞り込み、「福岡アジア文化賞審査委員会」(委員長:梶山千里九州大学総長)において業績等を考慮して総合的に検討の上4人の受賞者を内定。そして、「福岡アジア文化賞委員会」(会長:川合辰雄よかトピア記念国際財団理事長)において承認するという過程で厳正な選考を行い、2007年6月29日、受賞者を正式に決定した。

2. 第18回授賞式・関連行事

受賞者の栄誉を讃え、賞を贈る授賞式(9月13日)を中心に、市民とともに受賞者を迎え、交流するための行事を実施した。延べ4,000人以上の市民が参加し、アジア文化の精髓に触れるとともに、受賞者との交流を楽しんだ。

秋篠宮同妃両殿下ご臨席

第18回授賞式には、秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜りました。



式典の冒頭で秋篠宮殿下より「福岡アジア文化賞は、アジアの文化の保存と創造に対して貢献することを目的として大変意義深く、本日受賞される4人の方々に、心からお祝いを申し上げたく思います。皆様の優れた業績は、アジアの文化に対する貢献であることにとどまらず、人類社会全体の文化を豊かにするものであり、世界に対しての貴重な発信であります。」と、受賞者を讃えるお言葉を述べられました。

9/12 [受賞者懇談会]



川合理事長・吉田市長ら主催者が遠路来福した受賞者を歓迎

9/13 [授賞式] アクロス福岡

参加者:1,100人



アグネス・チャンさんの司会で和やかな雰囲気での授賞式



福岡国際スクールの子ども達から花束贈呈

9/13 [祝賀会]



アジアはひとつ!

9/14 [学校訪問]



シーサク先生、特別講義有難うございました!(香住丘高)

9/14 [学校訪問]



全身で刻むリズムを教わる子どもたち(四箇田小学校)

9/15 [市民フォーラム]



講演が終わっても、市民の興味は尽きません

9/16 [市民フォーラム]



パネルの大きさが分かるでしょうか?

3. 広報活動

記者発表

- ・第18回受賞者決定直後(6/29)に福岡で記者会見を開き、報道各社に受賞者および授賞の理由を発表した。
- ・7月~8月にかけてソウル(7/23)、バンコク(7/24)、ニューデリー(7/27)、台北(8/1)でそれぞれ受賞者の記者会見を行い、現地メディアの注目を集めた。会見にはタイ政府のクンジン・カイー文化大臣など著名人を含む多くの参加者が出席し、受賞の喜びを分かち合った。
- ・報道件数:国内57件 海外45件(新聞・雑誌・ラジオ・テレビ等)

その他

- ・ホームページ、メールマガジン、イベントサイト、ラジオ、新聞広告、街頭電光掲示板等各種メディアを活用し広報した。
- ・各関係機関・大学・団体、アジア料理店等にご協力をいただいてポスター・チラシにより参加者を募集した。

ASIANMONTH2008

2008年も福岡の秋は「アジア」一色!

- 第19回福岡アジア文化賞授賞式.....9/10
- アジアフォーカス・福岡国際映画祭2008.....9/12~21
- アジア太平洋フェスティバル.....10/9~13

主催 福岡市  
財団法人よかトピア記念国際財団  
協力 福岡アジア美術館  
福岡都市圏20大学  
協賛 財団法人西日本国際財団  
後援 財団法人福岡アジア都市研究所

第18回 福岡アジア文化賞 報告書

発行 福岡アジア文化賞委員会事務局  
〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市国際部内  
Tel 092-711-4930 Fax 092-735-4130  
e-mail acprize@gol.com  
http://www.city.fukuoka.lg.jp/asiaprize/



第18回

福岡アジア文化賞

Fukuoka Asian Culture Prize 2007

報告書





# 福岡アジア文化賞とは

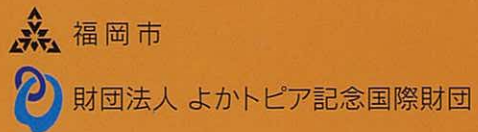
アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統をもつものを守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化においても画一化が迫られ、アジアの固有な文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、その固有で多様な文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本への文化の受け入れ窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の個性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解及び平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、今年までの18年間で73人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりや地域をみるようにアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

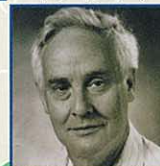
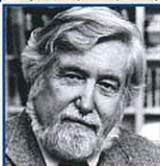
この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。



# 福岡アジア文化賞の受賞者

## アジア以外の国・地域

- 1 ジョゼフ・ニーダム● (中国科学史研究者)
- 2 ドナルド・キーン (日本文学・文化研究者)
- 3 クリフォード・ギアツ● (文化人類学者)
- 5 王廣武 (歴史学者)
- 6 ナム・ジュン・バイク● (ビデオ・アーティスト)
- 9 スタンレー・J・タンバイア (人類学者)
- 11 ベネディクト・アンダーソン (政治学者)
- 13 アンソニー・リード (歴史学者)



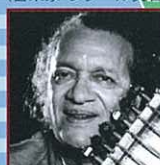
- 7 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン● (カフターリー歌手)
- 17 アクシム・ムフティ (民俗文化保存専門家)



- 16 タシ・ノルブ (伝統音楽家)
- 15 ラーム・ダヤル・ラケーシュ (民俗文化研究者)



- 2 ラヴィ・シャンカール (音楽家・シタール奏者)
- 5 バドマー・スブラマニヤム (舞踊家)
- 8 ロミラ・ターパル (歴史学者)
- 15 アムジャッド・アリ・カーン (サロード奏者)



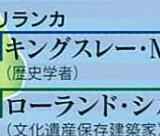
- 18 アシシュ・ナンディ (社会・文明評論家)



- 12 ムハマド・ユヌス (経済学者)



- 13 キングスレー・M・デ・シルワ (歴史学者)
- 15 ローランド・シルワ (文化遺産保存建築家)



- 1 創設特別賞
- 2 大賞
- 3 学術研究賞
- 4 芸術・文化賞
- ※数字は回数
- は故人

## 大賞 賞金:500万

アジアの文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより世界に対してアジアの文化の意義を示したものに贈る

## 学術研究賞 賞金:300万

アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献したものに贈る  
※学術研究:歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる。

## 芸術・文化賞 賞金:300万

アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成や発展に貢献したものに贈る  
※芸術・文化:美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる。

**福岡アジア文化賞 シンボルマーク**  
万物の生命を養う大地の緑と、人々の混沌とした強大な情熱の赤。そのあわいには、太古より漂い続ける精神的エネルギーが常に渦をなしている。人間が秘めた制御しきれぬエネルギーも、諸要素との調和の中で循環し、総体においてはついに円環を成す。そうした多様かつ固有なアジア文化の世界をこのマークは象徴している。

- 4 ナムジン・ノロバンザト● (音楽家)
- 17 ジャグダリン・ピラ (歴史学者)



- 1 巴 金● (作家)
- 4 費孝通● (社会学・人類学者)
- 7 王仲殊 (考古学者)
- 13 張芸謀 (映画監督)
- 14 徐 冰 (アーティスト)
- 15 厲以寧 (経済学者)
- 17 莫 言 (作家)



- 11 タン・トゥン● (歴史学者)
- 16 トー・カウ (図書館学者)
- 1 ククリット・プラモート● (作家・政治家)
- 5 スパトラディット・ディッサクン● (考古学・美術史学者)
- 10 ニティ・イヨウシーウォン (歴史学者)
- 12 タワン・ダッチャニー (画家)
- 8 チェン・ボン (劇作家・芸術家)
- 16 トアン・クワン・ブンニャウォン (織物研究家)
- 7 ファン・ファイ・レ (歴史学者)
- 18 シーサク・ワンリポードム (人類学・考古学者)



- 4 ウンク・A・アジズ (経済学者)
- 11 ハムザ・アワン・アマット● (影絵人形遣い)
- 13 ラット (マンガ家)
- 10 タン・ダウ (ビジュアルアーティスト)
- 14 ディック・リー (シンガーソングライター)



- 3 金元龍● (考古学者)
- 6 韓基彦 (教育学者)
- 8 林権澤 (映画監督)
- 9 李基文 (言語学者)
- 16 任東権 (民俗学者)

- 10 侯孝賢 (映画監督)
- 18 朱 銘 (彫刻家)



- 1 黒澤 明● (映画監督)
- 1 矢野 暢● (社会学者)
- 2 中根 千枝 (社会人類学者)
- 3 竹内 實 (中国研究者)
- 4 川喜田 二郎 (民族地理学者)
- 5 石井 米雄 (東南アジア研究者)
- 6 辛島 昇 (歴史学者)
- 7 衛藤 瀋吉● (国際関係研究者)
- 8 樋口 隆康 (考古学者)
- 9 上田 正昭 (歴史学者)
- 10 大林 太良● (民族学者)
- 12 速水 佑次郎 (経済学者)
- 14 外間 守善 (沖縄学者)
- 17 濱下 武志 (歴史学者)



- 18 金徳洙 (伝統芸能家)



- 3 レアンドロ・V・ロクシン● (建築家)
- 12 マリルー・ディアス・アバヤ (映画監督)
- 14 レイナルド・C・イレート (歴史学者)



- 2 タウフィック・アブドゥラ (歴史学者・社会学者)
- 6 クンチャラニグラット● (文化人類学者)
- 9 R. M. スダルソノ (舞踊家・舞踊研究者)
- 11 プラムディヤ・アナント・トゥール● (作家)



### CONTENTS

福岡アジア文化賞とは ..... 1

第18回受賞者

アシシュ・ナンディ ..... 3

シーサク・ワンリポードム ..... 5

朱 銘 ..... 7

金 徳洙 ..... 9

歴代受賞者名鑑 ..... 11

第18回福岡アジア文化賞について ..... 15



# アシシュ・ナンディ Ashis NANDY

社会・文明評論家

- |      |                       |      |                    |
|------|-----------------------|------|--------------------|
| 1937 | インド、ビハール州、バーガルプルに生まれる | 1994 | 独高等研究所研究員          |
| 1961 | ナーグプル大学大学院修士課程修了      | 1999 | 豪ポストコロナル研究所特別研究員   |
| 1965 | 発展途上社会研究センター研究員、のち所長  | 2006 | インド社会科学研究会議・国家指名会員 |
| 1988 | 米スミソニアン研究所研究員         |      |                    |



## アジア間の文化交流の復活こそ、インドの夢だった。

「今回の受賞は、私個人のささやかな業績に対するものではなく、広範なアジア諸国と諸文化を貫く、一つの意味表示であると捉えています。アジア社会の間での、ダイレクトな異文化交流を復活させることこそ、自由を求めて戦うインドの人々が夢見ていたことでした。植民地支配により、古くから続いてきたアジアの知性と文化の連帯は分断・破壊され、以降アジア圏での

文化相互交流は、西洋の介在、主として西洋型の大学ないしは研究システムが介在する形で進められてきました。アジアの多様な社会ないしは文化同士が、互いの間にダイレクトな繋がりを再び取り戻すための、アジア独自の領域判断と評価基準に基づいた、一つの努力と受け止めて受賞いたします」

## 地域から発信する創造のエネルギー。それが世界の民主主義を深化させる。

「また、民主主義という文化が真に成立するためには、グローバル・システムの底辺や周縁部に追いやられた人々にも、投票権と異議申立の権利が与えるべきであることはもちろん、教科書に出てくる政治理論の正当性を問う権利、さらには、自らの文化的資源を頼りに世界全体としての公共生活のあり方や人類の未来のあり方を改めて思い描く作業へ参加する権利

についても、認められねばなりません。まさに福岡アジア文化賞は、アジア文化の意義を認め、称賛するとともに、創造的エネルギーを地域から新たに放ちながら、グローバルな民主主義を深化させる、そんな取り組みであると思います。」

(2007年9月13日、授賞式挨拶より)

## 受賞理由

アシシュ・ナンディ氏は、インドのみでなくアジアを代表する社会・文明評論家である。その思考の範囲は、個人の尊厳から集団意識、政治心理、国家論、文明論にまで及ぶ。幅広く鋭い学術研究にとどまらず、市民運動にも積極的に参加する行動的知識人であり、「インドの良心」とも称されている。

ナンディ氏は、1937年にビハール州バーガルプルに生まれた。10歳の時、インドとパキスタンが英領インドから分離独立した際に繰り返された暴力と惨劇を目撃する。それが、同氏の自己形成の原点となっている。大学では社会学を専攻したが、国立発展途上社会研究センターに迎えられてから、臨床心理学へと接近していった。同センターでの思索と研究を通じて、臨床心理学と社会学とを統合させた独自の方法論を構築した。この間、諸外国の大学や研究機関に招かれて研究や講演を数多く行い、1992年から1997年には、同センターの所長を務めている。

同氏は、特定領域の研究者というよりも、幅広い諸問題について探究し思考する知識人である。その思考の立場

は、二つの軸を持つ。第一は、個人が抱える問題と現実世界の政治・社会・文化が抱える問題との接点に自らを置き、問題の本質を考えることである。これは、臨床心理学の方法論からの発展である。第二は、積極的な非暴力主義であり、これは、かつて目撃した悲惨な現実を原点に、ガンディー主義を再生させようとする理想主義的な志向である。この二つは、膨大な数にのぼる同氏の著作を貫く底流をなしており、現在、インド国内や世界で力を増しつつある国家・民族・宗教などの集团的利害に中心を置く主義・主張に対しても、同氏はこれらを基軸として、本質的な批判を行うとともに、市民や社会と連帯する草の根的な運動にも参加している。

このようにアシシュ・ナンディ氏は、精力的な著作活動や非暴力主義の信念に支えられた行動を通じて、政治問題、民族紛争等さまざまな問題を多面的に鋭く分析し、国境を越えた地球的規模の人類の共存・共生のあり方について提言を行うなど、世界に広く発信し問い続けており、まさしく「福岡アジア文化賞一大賞」にふさわしい。

市民フォーラム

## インドから考える

9/15 アクロス福岡

『日本また世界、さらには未来へのメッセージ』と題したナンディ氏の講演と、インドに関わる国際協力NGOを交えてのパネルディスカッションが行われた。300席の会場がほぼ埋まる盛況で、会場からも活発な質問が相次いだ。発言の要旨を紹介する。

### アシシュ・ナンディ

文化の多様性はいいことづくめではない。しかしそれを守らねばならない理由がある。

植民地はなくなっても、植民地主義は今も生きている。我々の未来をいわばハイジャックし、途上国の現在は先進国の過去であり、先進国の現在は途上国の未来とみなす考えだ。途上国自身としての望ましい社会のビジョンを持つことも許されない。



少数言語の消滅に代表されるように、「過去」への関心が欠落したグローバリズムの陰で、急速に伝統と文化多様性が失われている。それだけではなく、それに対する喪失感さえ感じないようになりつつある。エスニック料理や博物館の陳列品はさておき、文化や伝統へのノスタルジーなど国際競争についていけない連中の負け犬趣味という訳だ。一方で、寄り辺なき「文化的ホームレス」の大量発生をいいことに、為政者たちは都合のいい「文化」や「伝統」を作りだして大衆に与え、政治的に利用しようとしている。

文化の多様性を認めるということは、他の文化を受け入れ、それを理解し、自分のものとして使っていくことである。それは必ずしも楽しいばかりではない。文化間のコミュニケーションは、不安定で、時に不快でもあるかもしれない。しかしその相互作用を経てこそ、文化的意味の中で自分たちの表現や感覚を共有することもでき、一つの社会の理念の中では解決できない問題にも道が開けるのだ。近代日本の小説、映画を見ればわかるように、優れた文化はそうした葛藤の中で生み出されてきた。

むしろ文化には抑圧的、暴力的な側面もある。新しい隠微な形で潜んだ暴力性やイデオロギーもある。しかしそれに疑念を抱き、発見するののもまた文化の力である。一過的なものに惑わされないために、長期的にはやはり文化に、文化多様性に拠るに如くはないのである。

コーディネーター  
応地 利明 (立命館大学教授)

他文化との共生の経験で、日本はインドに学ぶべきだ。

まさに今、日本の自治体でも多文化共生、マイノリティの尊重ということが課題になっている。時に不快な…とナンディ氏は

いわれたが、それを乗り越えてきた経験をどこよりも持っているのがインドだ。日本では他者を自分たちの価値体系に同化させることしかしてこなかったが、「相互の交流により新しい価値体系を作り出していく」という方向をインドから学ばなければならぬ。

パネリスト  
芳賀 芳子 (子どもの性と命の教育コミッティ代表)

私たちは子どもの性的搾取の根絶のために活動するNGOで、ムンバイの売春地区の子どもへの教育支援もその一つ。一方、インドでの経験を通じて、伝統的な文化や生活習慣を誇りを持って守っている人々に会い、モノの豊かさや心の豊かさは別と思うことも多い。地球規模で商品が流通する時代だからこそ、個人と個人の間を糸口としての文化交流が大事と思う。

### 質問者

貧困と経済成長の関係、また教育は解決になるか。

### ナンディ

芳賀氏が眼のあたりにしたように、開発や経済成長で貧困が解消されるのではなく、むしろ新たな貧困が生み出されている。教育というより、貧困撲滅への強力な政治的な意思が必要だと思うが、為政者たちは核武装の方を優先しているかに見える。

### 応地

ちなみにナンディ氏はインドの核武装に最も強く反対の声を上げた一人。貧困が話題になったが、貧困を恥、撲滅すべきと単純に決めつけるだけではいけない。文化人類学者のO.ルイスがいったように、貧困も一つの文化であって、単に経済状態だけでなく複雑な文化的要素で構成されるものなので、それを解きほぐしながら見る必要がある。そこでも重要になってくるのは「交流」に違いない。

### 参加者の声



「インドが直面する問題は日本に当てはまる面も多く、示唆に富んだ講演でした」と立山睦彦さん、留美さん(福岡市城南区)

## 学校訪問

### 福岡県立修猷館高校

9/14

自由な校風で知られる修猷館高校。ナンディ先生は「自主性と自由な精神から創造的な文化が育まれる。」と、次代を担う若者達がこれから自分なりの文化を生みだし、文化の多様性に貢献することに期待を寄せました。このほか貧困問題、環境問題、インド・中国の経済成長など、関心ある生徒たちの質問は尽きるところなく、国や世代の差を超えて、アジアの未来を共に考える一時間となりました。

文化に優劣はない。自分たちの文化に誇りを持たなければならない

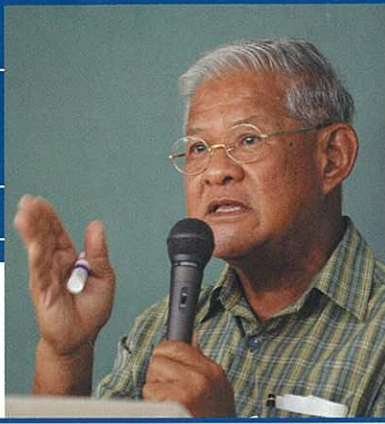




# シーサクク・ワンリポードム *Srisakra VALLIBHOTAMA*

人類学・考古学者

- 1938 タイ、バンコクに生まれる
- 1960 チュラーロンコーン大学卒業
- 1974 「ムアン・ポーラーン・ジャーナル」編集長
- 1977 シンラパコーン大学考古学部人類学科長
- 1980 アメリカ、コーネル大学客員教授
- 1986 京都大学東南アジア研究センター客員研究員
- 2001 シリントーン王女人類学センター理事



## タイ西洋化の四十年で犠牲となってきたのは、若い世代の「知」だった。

「私が研究を進めるにあたっての主な関心テーマとしては、やはり『自然と文化』ということにつきます。

というのは、私自身の個人的経験や学校教育を通じ、『四十年間の西洋化と経済発展の過程で若い世代が個人主義と物質主義の犠牲になってしまった』という認識を持つに至ったか

らです。若者たちは、自身について、同胞について、そしてグローバル化する世界について、あまりにも無知だ。これは、社会学、人類学、人文科学といった分野、つまり人間・自然・文化・社会について総体的に理解する基礎の学を、半世紀間なおざりにしていた教育制度にこそ問題があるのだと思う。」

## 今必要なのは、地域の「知」を築くことのできる人材を育てること。

「今私は、地元の人々による地域博物館を立ち上げる準備をタイ各地でしています。単なる収集・展示の場ではなく、古くから地域に伝わる知恵を集め、次世代に継承していくためでもあります。私が『地域史』という考え方にたどり着き、その手法に取り組んできたのも、地域の目線で地域の『知』を築くことで

きる人材を育てるためであり、それこそグローバル化する世界と上手く渡り合う『地域化』の基本であり、必要な作業だと思います。」

(2007年9月13日、授賞式挨拶より)

### 受賞理由

シーサクク・ワンリポードム氏は、タイだけでなく東南アジアを代表する人類学・考古学者であり、人類学と考古学、歴史学、民俗学を統合し、地域史に立脚した視点に立って、タイの歴史を大きく塗り替えた。

シーサクク氏の研究は、欧米の研究者の説に安易に依拠する自国の研究者への批判と、国家・王朝中心史観に終始したタイの従来の歴史観への疑問を提示した。また、タイ中心の一國史ではなく、自らの精力的な現地調査に基づき、地域史に立脚した新しい歴史像を再構築した。同氏の研究は多岐にわたり、中でも東北タイの先史考古学研究及びタイの古代都市と国家に関する研究は大きな業績である。前者については、徹底した現地調査に基づく遺跡目録を作成し、農業と塩と鉄の重要性を説き、また東北タイ独特の結界石の特徴と系譜から、信仰の伝統が先史時代から歴史時代まで継続したことを明らかにした。これらの研究により、「貧しい東北タイ」という従来の歴史像から、「豊かであった東北タイ」への歴史像転換の契機を作った。同氏が蓄積した東北タイ考古学情報の一部はインターネット上で公開され、国際的に高く評価されている。また後者の古代都市と国家に関する研究では、空

中写真を駆使して、最初の都市国家ドヴァーラヴァティーをはじめ、スコタイ王朝やアユタヤ王朝の都市計画と都市構造を解明するとともに、東南アジアを舞台とした交易活動がタイの古代都市と国家の成立のうえに大きな影響を与えたことを論じた。

チュラーロンコーン大学卒業後、西オーストラリア大学で人類学を学び、シンラパコーン大学考古学部人類学科で教育と研究に携わってきた。その間、さまざまな学術研究団体の要職を務め、スコタイ歴史公園開発プロジェクト主任社会学者など、タイ政府の文化財保護事業の各種委員会委員として重要な提言を行ってきた。また、タイの考古学・歴史学研究的代表的季刊誌「ムアン・ポーラーン・ジャーナル」を主宰し、その編集長として研究成果を広く社会に還元することに長い期間にわたり尽力するなど、行動する学者でもある。

このようにシーサクク氏の研究と活動は、考古学資料に基づき、独自の人類学の視点から、地域史と環境を重視したタイ及び東南アジア史像を再構築したものであり、まさしく「福岡アジア文化賞—学術研究賞」にふさわしい。

市民フォーラム

## タイ古代国家の成立と展開

9/15 アクロス福岡

『今、甦る—タイの古代都市と人々の息吹き—』というテーマで、日本・タイ両国を代表する二人の碩学に、気鋭の研究者を交えてのシンポジウム。豊富な写真や地図が物語る遺跡のありさまに、約240名の参加者の思いは古代文明の世界に飛んだ。主な発言を紹介する。

### シーサクク・ワンリポードム

7~10世紀頃のタイにはドヴァーラヴァティー(墮羅鉢底)という古代王国があったと、多くの学者が信じている。しかし、私は現地調査を通じて、中央集権な「王国」ではなく、水運・陸運の要地に栄えた都市国家群があったのみだという結論に至った。インドやクメール文化(カンボジア)からの影響を受けつつ、諸都市はさかんに交易を行っていた。文化的関係を保ちながら王族同士の血縁も相まって緩やかな連合を成しており、15世紀にアユタヤ朝が成立するまで「王国」といえるものはなかったと考えている。

パネリスト

石井 米雄 (京都大学名誉教授、第5回福岡アジア文化賞受賞者)

東南アジアを「大陸部」と「島嶼部」に分けて考えていた従来の東南アジア史学に対して、シーサクク氏の考え方は海が一つの権力を生み出す母体となる、つまり海上交易を基盤に政治と商業の中心である港(=「港市国家」)が形成され、それが内陸に成長して国が出来ていくという、大変新しい考え方だ。

パネリスト

伊東 利勝 (愛知大学教授)

ミャンマーのピュー文化の遺跡で様々な紋様の銀貨が出土する。チャンバ(ベトナム南部)からドヴァーラヴァティー、ピューまで、すべての地域に共通する紋様もあれば、特定の二地域だけに出土するもの、あるいはほぼ全種類が揃った都市などあって、これは様々な交易ルートが存在し、その取引に銀貨が使われていたことを想像させるに十分だ。

コーディネーター

新田 栄治 (鹿児島大学教授)

ドヴァーラヴァティーはタイの歴史上非常に重要な時期であるというお話を聞いた。では、今のタイ国民はどう認識しているのか。

### シーサクク

ドヴァーラヴァティーといっても殆どの人は知らず、タイの教科書でも13世紀のスコタイ朝からいきなり国の歴史が始まるように書かれている。これはタイを一民族、一国家とみなす誤った考え方だ。それ以前にも様々な都市国家が存在していたとともに、それらを結んで、海岸の港町から内陸部まで、今のベトナムからビルマまでを含む広い交易のネットワークの存在を強調したい。そのことによって、私は歴史を再構築したいと考えている。



豊富な資料で古代のタイ世界を鮮やかに紹介

### 学校訪問

かすみがおか

## 福岡県立香住丘高等学校

9/14

シーサクク先生の講演は「東北タイの文明」、難しそうなテーマの英語講義。でも英語に自信の(?)「英語科」生徒は通訳なしで挑戦。「むかしばなし」が過去と現在をつなぐ役割、文明にとっての塩と金属の重要性、仏教の伝播、アンコールワットのことなど、千年の時を超え、アジアの海陸にまたがる人類の営みの壮大な物語に生徒は聞き入りました。

生徒も学校の紹介と日本文化について英語でプレゼン。「もみじ」が好きというシーサクク先生と質疑応答を交わし、心通うひとときでした。シーサクク先生、サンキューベリマッチ・コーンカツ!(ありがとう)



真剣にメモを取る生徒。講義はすべて英語。さらにあとで英語での感想文も出さないとイケない



生徒のプレゼン。英語科なのでもちろん英語で説明します



生徒の楽しい英語の説明に思わず笑顔。右は長女のアーバーピラットさん



ジュウミン 朱銘 JU Ming

彫刻家

- |                               |                      |
|-------------------------------|----------------------|
| 1938 台湾、苗栗県通霄に生まれる。           | 1986 シンガポール国立博物館にて個展 |
| 1953 彫刻師 李金川氏に木彫を学ぶ。彫刻師として活躍。 | 1995 箱根彫刻の森美術館にて個展   |
| 1968~76 彫刻家 楊英風氏に師事           | 1997 パリ、ヴァンドーム広場で展示  |
| 1976 国立歴史博物館にて初の個展            | 1999 台北県金山に朱銘美術館開館   |
| 1981~83 ニューヨークにて創作活動          | 2006 北京、中国美術館にて個展    |



まず、努力して先生の教えたものを忘れてしまおう。

「学ぶ」ということは、他人の技術をもらうだけで、単なるプロセスに過ぎない。芸術に必要なのはその対極にある態度、「修行」です。修行と学習とは違う。仏教であれば衣食住のすべてが修行であるように、頭で覚えてどうにかなるものではない。まず、先生が教えたものを、忘れる努力をすることからはじめる。そして他人のものを一掃してしまったところで、初めて自分というものが表現できる。

私の創作では、例えば彫刻を彫るのを速くしてみる。極限までスピードをあげて何個も何個も彫る。速さに自分の思考が

ついていけないぐらいになり、無我の境地に至ったところで、まるで思想そのものが一気に彫り上がったような、完璧な美を追求することができます。何日もかけて細工したものより、シンプルなものの方が実は難度が高い。しかしむしろこちらの方が、研ぎ澄まされた、実にいい形ができる。だから私はいつも『藝術即修行』とっている。言ってみれば、李白が酔の極みにこそ佳い詩ができるというのと同じですね。」

(2007年9月16日、市民フォーラムでの講演より)

受賞理由

朱銘氏はアジアを代表する彫刻家である。東洋の精神性を独自の手法で表現するダイナミックな作品で世界を舞台に活躍し、専門家のみならず市民からも幅広い支持を得ている。また、自らの作品を展覧する朱銘美術館を創設するなど、芸術普及における功績にも多大なものがある。

朱銘氏(本名:朱川泰)は、1938年、台湾・苗栗県に生まれた。当初、伝統的な寺院彫刻を学んだが、31歳で台湾彫刻界の重鎮だった楊英風氏の門をくぐり、その指導の下、伝統木彫とモダニズム彫刻を融合させつつも、次第にそれを越えた独特のスタイルを編み出した。1976年に国立歴史博物館(台北市)で行われた初の個展では、『同心協力』『小媽祖』など風土に根ざした題材を、生命力みなぎる力強い木彫で表現し、当時、文化的アイデンティティをめぐる議論が白熱していた台湾芸術界に熱狂的に迎え入れられ、半年間の会期延長まで引き起こす鮮烈なデビューを果たした。さらに、他の追従を許さぬダイナミックな表現「太極拳シリーズ」は彼の名声確立し、台湾のみならずアジア、欧米でも高く評価された。以後、個や集

団としての人間が見事な調和をみせる「人間シリーズ」や、ステンレス、ゴム、スポンジなどの新素材を使った試みなど、その芸術上の挑戦は止まるところを知らない。

朱氏は、1977年の日本を皮切りに、アジア、欧米の各地で精力的に個展を開催しているが、くわえて1997年のパリの中心にあるヴァンドーム広場をはじめとするさまざまな公共空間での展示も彼の名声を高める要因となった。このことは、1999年に台北県金山の広大な敷地での野外彫刻美術館「朱銘美術館」の創設に結実し、緑豊かな自然の中で作品と環境が共鳴しあう、朱銘芸術集大成の場として、多くの人々を魅了している。

表現の中核に流れる深い東洋の精神性。常に革新を追求する創造へのエネルギー。伝統彫刻とモダニズム彫刻の両軸に支えられた他に類を見ないダイナミックな表現力。それら全てを備えた朱銘氏は、まさに現代アジア美術界の巨匠とも呼ぶべき存在であり、アジアおよび世界に賞賛されたその力量と業績は、まさしく「福岡アジア文化賞-芸術・文化賞」にふさわしい。

市民フォーラム

アーティスト・トーク

9/16 福岡アジア美術館

特別展示「朱銘展」開催中の福岡アジア美術館で、台湾から運んだ自作を前に「藝術とは修行である」と朱銘芸術の精髓を語る朱銘氏。(左頁に要旨)  
今回持ってこれなかった作品は数十枚のスライドで紹介。年齢を感じさせない氏の創造意欲について、立ち見も含め120名余りが詰めかけた会場からは次々に質問の手が上がった。

質問者

創作活動において、ひらめきとか発見、感性が大事ということですが、それも修行によってもたらされるものですか？

朱銘

「ひらめき」は最初学び始めた人には重要かもしれない。しかし、その道を極めた者にとっては「ひらめき」は必要ない。芸術を完成するためにしなければならないことは沢山あって、「ひらめき」だけで片付けるのは無理な話です。私はアイデアが湧きすぎて、創りきれないくらいです。

質問者

作品を創る情熱を助ける日常生活の極意とか、信条があったら教えてくださいませんか。

朱銘

毎日忙しくしていて、たまには自分でお茶を入れて飲むぐらいの余裕は欲しいですが、実際のところ早寝早起き、寝る時間と食事以外はほとんど創作に使っていますね。取材や接待も避けて、ひたすら創作に専念する毎日。仕事のために生まれたと、自分では思っています。

質問者

これからの制作のテーマは。

朱銘

「三軍(軍隊)シリーズ」「警察シリーズ」の次は、「科学者シリー



朱銘美術館の風景パネルを背に芸術論は白熱した



「『太極拳シリーズ』は欧州の人々に感銘を与えた」(解説:福岡アジア美術館 安永幸一顧問)

ズ」を制作中。火薬、羅針盤のような中国の四大発明を生み出した偉大な科学者達について、顔を思い浮かべられますか？ はっきりイメージできないでしょう。だからこそ形を与えて、子どもが親しみ、人類の偉業を振り返るようにせねばと。作りたいものは尽きません。SARS発生の時、危険を顧みず流行を食い止めるために闘った沢山の英雄たち。この姿も彫刻にして留めていかないといけないから「英雄シリーズ」。人間を描こうとすると、キリがありませんね。アイデアが行列して待ってるんですよ(笑)。

学校訪問

福岡市立馬出小学校

9/14

「身近なもので芸術してみよう」というテーマで、今日の図工の時間は朱銘先生の特別授業。スポンジ、ペットボトル、木ぎれなどどこにでもある材料を自由に使って、自分だけの顔を作ってみよう！ 普通の授業は材料も順番も教えられますが、今回は決まったやり方はありません。最初は戸惑っていた子どもたちも、九州高校デザイン科のお兄さんお姉さんたちと一緒に、曲げる、切る、削る、思い思いのやり方で創作に夢中になっていきます。一人ひとり違う顔になっていくのに朱銘先生はご満足。

最後に撮ったみんなの笑顔を見て下さい！





キム ドクス  
**金 徳洙** KIM Duk-soo

伝統芸能家

- 1952 韓国、忠清南道大田に生まれる
- 1957 男寺党に入団
- 1959 全国農楽競演大会で大統領賞
- 1978 「サムルノリ」創団。以後世界各国で公演多数。
- 1988 ソウル五輪聖火イベントで演奏
- 1998 韓国芸術総合大学伝統芸術院演劇科教授
- 2007 芸道50周年記念公演「キル(道)」  
同年、文化勳章銀冠章受章。



人間と自然を引き離すデジタル時代。だからこそ、アナログの私が選ばれたと思う。

「杖鼓を叩き続けてきた一人の芸人として、一言だけ申し上げたいと思います。世界中どの国、民族であっても、打楽器というものは共通して、一番人間的な、自然なエネルギーを私たちに与えてくれる楽器です。

を引き離してしまうようになりました。大変恐ろしいことです。人間はデジタルなものだけを持って生きていくことはできません。自然的なもの。人間的なもの。アナログ的なものがなければ、デジタルも存在し得ないのです。そんな時代に、だからこそ私が賞に選ばれたのだと思っています。」

いつからか、この地球村では『デジタル文化』が人間と自然

すべての民族文化に、「神明」—自分自身から湧き起こるエネルギーが備わっている。

「音楽をして興が乗ったとき。韓国語では『神明』といいますが、身のうちから湧き起こる力、突き上げてくるようなエネルギーがあります。それは全世界のあらゆる民族が持っているはずで、これからも時代を超え、アジアだけでなくすべての民族のその固有エネルギーが生き残っていかなければいけないと思います。

だと私は思っています。」  
(2007年9月12日、受賞者懇談会挨拶より)

今年も1月に福岡で演奏しましたが、実は43年前、初めて来日公演したのもこの福岡でした。最初に訪れたこの福岡で、私が今までしてきたことを評価された。それは、私と同じように、一筋に、真に生きてきた人達にも、勇気と希望を与えたということだと思います。だから、この福岡アジア文化賞は、21世紀の、すべての人達が一緒に生きていく、そういう共生の文化の賞



授賞式での特別演奏  
2007年9月13日

受賞理由

金徳洙氏は、韓国を代表する伝統芸能家であり、同国の伝統音楽の継承とともに現代の先端音楽を創造し続けている。特に4種類の伝統的打楽器による演奏集団「サムルノリ」を結成し、その演奏活動は、韓国のみならず国際的にも高い評価を受けている。

金氏は、5歳の時に父親に連れられて、韓国の伝統的な旅芸人集団の「男寺党」に入団し、芸人としての人生を歩みだした。7歳で「杖鼓の神童」として最年少で大統領賞を受賞するなど早くから才能を発揮している。国楽芸術学校における中学・高校時代には、伝統音楽の技法や理論を学び、やがてメキシコ五輪、大阪万博などの国際的祭典での演奏を通じて、韓国の伝統的リズムの貴重さを実感したという。その経験を背景に、伝統的リズムを採集・整理し、継承するとともに、新しい時代の感性にあった音楽表現を追求していった。

1978年、「サムルノリ」を結成し、多面的な活動を展開

している。日本をはじめ世界50余か国で5,500回を超える公演を行い、韓国伝統音楽の現代的な継承と同時に、時代の最先端の音楽を発表し続けている。

1993年には、NPO法人サムルノリ・ハヌルリムを発足させ、後進の育成に努力するとともに、ジャズやオーケストラ、さらには舞踊、演劇、絵画などとのコラボレーション活動にも尽力し、伝統文化の現代化に大きく貢献している。これらの活動に対して文化勳章銀冠章、韓国放送公社国楽大賞など多くの賞を受賞し、朝鮮日報からは、伝統芸術・芸能の領域から唯一人「大韓民国50年の50大人物」として選定された。また、韓国芸術総合大学伝統芸術院教授として、伝統芸能の研究とともに後進の育成にも力を注いでいる。

韓国を代表する伝統芸能家として、国際的にも高い評価を受けている金徳洙氏は、まさしく「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい。

市民  
フォーラム

現代に発展する韓国の伝統音楽

9/16 イムズホール

県外からの参加者も多かった金徳洙氏によるフォーラム。約320名の参加者が、サムルノリの魅せる『躍動する音とリズムの世界』を堪能した。

出演 金徳洙サムルノリ

- 金徳洙 イ・ドンジュ
- 李東柱 キム・ミンサン
- 金基暢 キム・ギチャン
- 金珠相 キム・ミンサン
- 朱英浩 チュ・ヨンホ

解説 藤井知昭(国際文化研究所所長)

- 演目 ムンクツ
- チャンゴ・ソロ
- ソルチャンゴカラク
- 農楽カラク
- 散調
- パンクツ

チャンゴ・ソロ 장구 솔로



この気魄。超絶技巧が打ち出すリズムに神明が宿る

パンクツ 판굿



舞う、叩く、廻る、跳ぶ! これは最早「演奏」ではない。まさに「遊撃」であり「演劇」だ



伝統舞踊 「散調」 산조



金利恵夫人は高名な舞踏家として知られる



「サムルノリはいわばルネッサンス、民俗芸能の再創造」と解説する藤井知昭国際文化研究所所長(右)

受賞後、早くも12月に福岡を訪問

9月の授賞式の感動も醒めやらぬ12月26日に、金徳洙氏がチャンゴ・ワークショップ開催のため再び福岡の地に降り立った。

福岡市役所を訪れた氏は「誰もがアジア文化に触れられるような、文化交流の拠点都市になってほしい」と福岡への期待を語った。



写真左より福岡市高田副市長、金徳洙氏、サムルノリ・サークル「響気」李代表

学校  
訪問

しかた 福岡市立四箇田小学校

9/14

金徳洙先生がやってきた!

躍動するリズム 全身で体感

「ヨロブン アンニョンハシムニカ〜!(みなさんこんにちは)」全校生徒が待つ体育館に、太鼓の音が響いてきました。カーテンが開くと今日の特別講師、金徳洙先生率いるサムルノリの登場です。大きな体育館全体が、揺さぶられているような激しく、速いリズム。それは今日、韓国の伝統音楽に初めて触れる子どもたちの心も揺さぶるかのようでした。今日の主な楽器は4つ。それぞれ自然界の音を表しているとのこと。「じゃあ、この音は何でしょうか?」「かみなりー!」クイズで韓国の音楽を勉強する、楽しい授業です。

1年生から6年生まで揃っているので、学年ごとに違うリズムを練習。覚えたら、全校生徒と一緒にやってみよう! 隣の学年につられないように、うまく自分のリズムでできるかな? 跳ぶ、しゃがむ、叩く、踏む、全身で表現し、感じるリズムにみんな夢中です。1時間は余りに短く、名残惜しい子どもたちから退場する一行は握手攻めに遭いました。優れた伝統芸能家である金徳洙さんは、とても教え上手な先生という一面もあったのでした。



子どもは大人より「本物」がわかる。この真剣な眼差しが何よりの証拠



# 福岡アジア文化賞

## 歴代受賞者名鑑

創設以来73名にのぼる福岡アジア文化賞受賞者は、  
 国・地域も、分野も広範囲にわたり、まさに固有かつ多様なアジア文化を守り、  
 創って来た功労者として、その功績はアジアの文化史に燦然と輝いています。  
 その一人ひとりを知ることは、激動の時代に守り通し、  
 あるいは変貌を遂げ、あるいは新たに芽吹いてきたアジアの文化を俯瞰し、  
 その未来に思いを致すことに他なりません。  
 今までの歴代の受賞者を振り返って、紹介しましょう。

書籍紹介  
 「福岡アジア文化賞の人々」  
 1999年連合出版刊、3,499円  
 (ISBN4-89772-150-4)

1999年に賞創設第10回を記念して発行した記録・講演集。  
 第9回までの福岡アジア文化賞受賞者三十余氏が語る「私の道、  
 私の転機、私の中のアジア」。amazon、楽天BOOKS等で取扱中!



### 第1回 1990

**創設特別賞** 中国(作家) ●  
**巴金**  
 『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

**創設特別賞** 日本(映画監督) ●  
**黒澤 明**  
 『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

**創設特別賞** イギリス(中国科学史研究者) ●  
**ジョゼフ・ニーダム**  
 中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

**創設特別賞** タイ(作家・政治家) ●  
**ククリット・プラモート**  
 大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

**創設特別賞** 日本(社会学者) ●  
**矢野 暢**  
 日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。



### 第2回 1991

**大賞** インド(音楽家・シタール奏者) ●  
**ラヴィ・シャンカール**  
 豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

**学術研究賞** インドネシア(歴史学者・社会学者) ●  
**タウフィック・アブドゥラ**  
 東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

**学術研究賞** 日本(社会人類学者) ●  
**中根 千枝**  
 アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、『タテ社会論』等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

**芸術・文化賞** アメリカ(日本文学・文化研究者) ●  
**ドナルド・キーン**  
 大著『日本文学史』をはじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

### 第3回 1992

**大賞** 韓国(考古学者) ●  
**金 元龍**  
 東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

**学術研究賞** アメリカ(文化人類学者) ●  
**クリフォード・ギアツ**  
 インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

**学術研究賞** 日本(中国研究者) ●  
**竹内 實**  
 社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

**芸術・文化賞** フィリピン(建築家) ●  
**レアンドロ・V・ロクシン**  
 東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

### 第4回 1993

**大賞** 中国(社会学・人類学者) ●  
**費 孝通**  
 中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

**学術研究賞** マレーシア(経済学者) ●  
**ウンク・A・アジズ**  
 マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

**学術研究賞** 日本(民族地理学者) ●  
**川喜田 二郎**  
 ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。

**芸術・文化賞** モンゴル(声楽家) ●  
**ナムジリン・ノロバンザト**  
 モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

### 第5回 1994

**大賞** タイ(考古学・美術史学者) ●  
**スパトラディット・ディッサクン**  
 タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界的位置づけに果たした功績は偉大。

**学術研究賞** オーストラリア(歴史学者) ●  
**王 廣武**  
 華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

**学術研究賞** 日本(東南アジア研究者) ●  
**石井 米雄**  
 タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。(6P参照)

**芸術・文化賞** インド(舞踊家) ●  
**パドマー・スブラマニヤム**  
 インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設定など教育面にも貢献。

### 第6回 1995

**大賞** インドネシア(文化人類学者) ●  
**クンチャラニングラット**  
 インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

**学術研究賞** 韓国(教育学者) ●  
**韓 基彦**  
 独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

**学術研究賞** 日本(歴史学者) ●  
**辛島 昇**  
 刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

**芸術・文化賞** アメリカ(ビデオ・アーティスト) ●  
**ナム・ジュン・パイク**  
 テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

### 第7回 1996

**大賞** 中国(考古学者) ●  
**王 仲殊**  
 古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

**学術研究賞** ベトナム(歴史学者) ●  
**ファン・ファイ・レ**  
 イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新発見をもたらした歴史学者。

**学術研究賞** 日本(国際関係研究者) ●  
**衛藤 藩吉**  
 中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

**芸術・文化賞** パキスタン(カフワリー歌手) ●  
**ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン**  
 イスラム宗教歌謡カフワリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。



第8回 1997

**大賞** **チェン・ボン** カンボジア(劇作家・芸術家)

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

**学術研究賞** **ロミラ・ターバル** インド(歴史学者)

独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

**学術研究賞** **樋口 隆康** 日本(考古学者)

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

**芸術・文化賞** **林 権澤** 韓国(映画監督)

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

**大賞** **李 基文** 韓国(言語学者)

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

**学術研究賞** **スタンレー・J・タンバイア** アメリカ(人類学者)

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

**学術研究賞** **上田 正昭** 日本(歴史学者)

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

**芸術・文化賞** **R. M. スダルソ** インドネシア(舞踊家・舞踊研究者)

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

**大賞** **侯 孝賢** 台湾(映画監督)

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

**学術研究賞** **大林 太良** 日本(民族学者)

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究者の泰斗。

**学術研究賞** **ニティ・イヨウシーウォン** タイ(歴史学者)

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

**芸術・文化賞** **タン・ダウ** シンガポール(ヴィジュアルアーティスト)

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

**大賞** **プラムディヤ・アナンタ・トゥール** インドネシア(作家)

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

**学術研究賞** **タン・トゥン** ミャンマー(歴史学者)

厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

**学術研究賞** **ベネディクト・アンダーソン** アイルランド(政治学者)

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

**芸術・文化賞** **ハムザ・アワン・アマット** マレーシア(影絵人形遣い)

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。

第12回 2001

**大賞** **ムハマド・ユヌス** バングラデシュ(経済学者)

「グラミン銀行」を創設しマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

**学術研究賞** **速水 佑次郎** 日本(経済学者)

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

**芸術・文化賞** **タワン・ダッチャニー** タイ(画家)

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

**芸術・文化賞** **マリルー・ディアス=アバヤ** フィリピン(映画監督)

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

**大賞** **張 芸謀** 中国(映画監督)

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

**学術研究賞** **キングスレー・M・デ・シルワ** スリランカ(歴史学者)

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

**学術研究賞** **アンソニー・リード** オーストラリア(歴史学者)

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

**芸術・文化賞** **ラット** マレーシア(マンガ家)

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

**大賞** **外間 守善** 日本(沖縄学者)

「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

**学術研究賞** **レイナルド・C・イレート** フィリピン(歴史学者)

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

**芸術・文化賞** **徐 冰** 中国(アーティスト)

独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通して東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

**芸術・文化賞** **ディック・リー** シンガポール(シンガーソングライター)

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

**大賞** **アムジャッド・アリ・カーン** インド(サロッド奏者)

インド古典楽器「サロッド」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超越する」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

**学術研究賞** **厲 以寧** 中国(経済学者)

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

**学術研究賞** **ラーム・ダヤル・ラケーシュ** ネパール(民俗文化研究者)

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

**芸術・文化賞** **ローランド・シルワ** スリランカ(文化遺産保存建築家)

イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

**大賞** **任 東権** 韓国(民俗学者)

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

**学術研究賞** **トー・カウ** ミャンマー(図書館学者)

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文書保存学の泰斗。

**芸術・文化賞** **ドアンドゥアン・ブンニャウォン** ラオス(織物研究者)

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。

**芸術・文化賞** **タシ・ノルブ** ブータン(伝統音楽家)

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるバイオニア。

第17回 2006

**大賞** **莫 言** 中国(作家)

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。

**学術研究賞** **シャグダリン・ピラ** モンゴル(歴史学者)

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

**学術研究賞** **濱下 武志** 日本(歴史学者)

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

**芸術・文化賞** **アクシ・ムフティ** パキスタン(民俗文化保存専門家)

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。